

ギ・ド・モーパッサン「マダム・バチスト」における群衆について

長谷川久礼満

はじめに

ギ・ド・モーパッサン(一八五〇—一八九三)の書いたあらゆるジャンルの文章のなかで、「群衆」はひとつの強迫観念のようなものとして繰り返し、その姿を現している。

今日では、モーパッサンはもっぱら短篇小説の名手という文学者としての側面ばかりが有名で、彼が新聞に論説記事を発表していたことはあまり知られていない。それらの論説記事の内容は多岐にわたるものであるが、同時代の社会を批判するという文脈において、モーパッサンは群衆な⁽¹⁾いしは大衆について繰返し言及している。共和政体の原理である「平等」という観念に我慢がでななかったこの知的エリート主義の新聞論説家は、群衆ないし大衆を、普通選

挙を通じての議会制民主主義という唾棄すべき政体の担い手として弾劾している。一方、このような政治的主体としての群衆⁽²⁾大衆への軽蔑とは別に、群衆に関してモーパッサンを怖れさせるのは、その反理性的性格である。なぜ群衆は盲目的な情念にいつも簡単に支配され、想像を絶する暴力をふるうものとなるのか。同時代の群衆心理学者といわれる人々がその考察対象としたこの不可解な疑問をモーパッサンも共有していたのである。以上のようなモーパッサンの新聞論説記事における群衆についての言説の根底には何があるのか。チェリー・ポワイエは、それは自己消失の恐怖としている。⁽³⁾ 妥当な意見であろう。モーパッサンが平等の観念とそれをもとにしたすべてのものを忌避したのは、それによって個人の差異、固有性、つまりアイデン

ティティイーが蹂躪されると感じたからだ。また群衆の反理性的性格に対する怖れは、群衆に呑み込まれて自分のアイデンティティを喪失することに対する恐怖に由来するものであるだろう。このような群衆の恐怖は、支配階級出身の同世代の文学者の多くが共有していたものであり、時代のステレオ・タイプというべきものであった。⁽⁴⁾したがって、モーパッサンの新聞論説記事における群衆についての言説は、現代のわれわれにとって独創的な見解を示すものとして読むことは難しい。しかしそれでも、モーパッサンにおいて群衆がアイデンティティーの問題と密接に関わるものであることがこれらの新聞論説記事のなかの言説において確認できるだろう。

モーパッサンにおける群衆のテーマの独自性は、とりわけ文学作品のうちに求めるべきである。というのも、多くの新聞論説記事のなかでただ侮蔑もしくは恐怖の対象として記述されている群衆が、作品世界ではひとつの文学的形象として重要な機能を担わされていると考えられるからである。そもそもモーパッサンの文学的中心的課題は、自己と他者の関係、アイデンティティーの問題であり、その主要なプロットは、他者による主人公の自己喪失の過程をも

とにしていることが近年の研究によって明らかにされている。⁽⁵⁾作品世界に登場する他者は、主人公の主体のアイデンティティーを執拗に脅かし、最終的にはその消滅へと導くものである。このようなプロットにおける群衆の機能は、主人公の自己喪失の状況を鏡のように反映するものであることを指摘したのが、クローディーヌ・ジャケッチとアントニア・フォニイの研究である。長篇小説の空間を分析したジャケッチは、長篇小説の前半と後半の対称性に注目し、モーパッサンは同一の場所における群衆の有無によって、主人公のおかれた心的状況の変化を暗示しているという。⁽⁶⁾

またアントニア・フォニイは、『女の一生』(『Une vie』, 1883)におけるアンシアン・レジームから革命後の新体制への移行が、差異をもった集団からなる身分社会から、差異のない群衆のみからなるブルジョワジーの社会への移行であるとし、貴族階級の女性主人公が群衆からなる新体制の社会のもとでそのアイデンティティーを喪失する過程をしるしづけるものとして描かれているという。⁽⁷⁾群衆はこのように作品のプロットのなかで主人公のアイデンティティーの崩壊過程を暗示するものとして重要な機能を担わされていることが明らかにされてきた。しかしこれらの研

究は、長篇小説のみを分析対象としており、短篇小説のプロットにおける群衆の機能は本格的に論じられていないきらいがある。

モーパッサンの短篇小説のなかには群衆が登場人物を徹底的に迫害する内容をもつ作品がいくつ也存在する。なかでも短篇小説「マダム・バチスト」(『Madame Baptiste』1882)は、女性主人公を執拗に迫害し、ついには死へといたらせる群衆が描かれている。本稿では、モーパッサンにおける群衆のテーマが、短篇小説においても、長篇小説に見られるような重要な機能を担うものとして作品のプロットにおおきく関わる形象であることを「マダム・バチスト」という具体的なひとつの短篇作品の分析を通じて示し、さらに新たな知見を付け加えたい。本稿の構成としては、一において、モーパッサンの短篇小説のプロットについての先行研究を概観する。そして二において、「マダム・バチスト」における群衆の機能を主人公の心的崩壊の過程をもとにしたプロットに即して分析する。

一 「畏」の寓話」としてのモーパッサン文学

一 ― 「畏」の「テーマ」の発見者―ベナール・クルソドン

モーパッサンが世に送り出した短篇小説は、三百篇以上あり、その「主題」(subject)も多岐にわたっているものである。恋愛を扱った作品群、金銭問題を扱った作品群、戦争を扱った作品群、狂気や異常心理を扱った作品群など、モーパッサンの短篇小説はその「主題」によって分類されることが多かった。しかし、一九七三年に刊行されたミシュリーヌ・ベナール・クルソドンの『モーパッサン作品世界のテーマ的構造的研究所：畏』は、それまで「主題」のレベルで分類されていたモーパッサンの文学作品の基部に、「畏」というひとつの「テーマ」が存在することをはじめに指摘した。「テーマ」(theme)とは、「主題群」(subjects)の基部に存する原初的な強迫観念という意味である。作品世界に遍在する暴力性に注目したベナール・クルソドンは、「女性」、「愛」、「自然」、「神」などの複数の「仮面をもつ「敵意」が、餌食となる存在(人・動物)を隠

れた場所で待伏せしながら、それを誘惑する「畏」を仕掛けて、ついには滅ぼしてしまうという「テーマ」を抽出したのである。

そしてベナール・クルソドンは、作品世界に見出される多様な形象、事物は、すべてこの「畏」の「テーマ」に密接に関係するものとして存在することを指摘した。一見多様なものとしてあるかのように見える形象、事物には、共通の特徴が見られる。それは、「縛ること」、「閉じ込めること」、「傷つけること」といった「畏」の機能を指示するという特徴であり、ベナール・クルソドンは、形象と事物を、そのような特徴を有するものとして、「絆」、「餌」、「網」、「水」、「深さ」、「穴」、「閉域」、「監禁用の事物」、「鋭利な事物」、「破壊するための事物」といった項目によって分類したのである。

モーパッサンの作品世界は、ベナール・クルソドンによって、「畏」の「テーマ」から再編され、形象と事物の機能が「テーマ」に収斂するものとしてあることが解明された。しかし、この「テーマ」をどのように解釈すべきかという問題は、精神分析学と一定の距離をおきたいというベナール・クルソドンの意図によって回避された。⁽⁹⁾

——二 アントニア・フォニイ「畏」の「テーマ」の精神分析的解釈…《太古的母親》の権力

1 子宮のファンタスム

ベナール・クルソドンがモーパッサンの作品から抽出した「畏」の「テーマ」に精神分析的な解釈を施したのがアントニア・フォニイの一連の研究である。⁽¹⁰⁾フォニイの研究の独自性は、ベナール・クルソドンがモーパッサンの作品世界におけるその構造的偏在性を指摘する「畏」が、「こどもを生んではひきもどして殺害する子宮の太古的ファンタスム」を表象したものであるという精神分析的解釈の提示にある。そしてフォニイは、この「子宮の太古的ファンタスム」に由来する「畏の寓話」がモーパッサンの作品のすべての物語叙述のシェーマとなっているという。

アントニア・フォニイによれば、ベナール・クルソドンのいう「敵意」とは、この「子宮の太古的ファンタスム」の不可視の中心を占める「太古的母親」(《la mère archaïque》)である。作品世界において登場人物たちに「畏」をかけるのはこの「太古的母親」である。この「太古的母親」は、「容器」(《contenant》)、「空間」(《es-

face) など子どもがそのなかで生きる環境そのものであるゆえに、われわれはそれを認識することはできない。モーパッサンの作品世界の「非現実的な他処」(「L'ailleurs irréel」)、「神秘的な宿命」(「la fatalité mystérieuse」)、「底なき底」(「le fond sans fond」)などという言葉で語られるものは、この「太古的母親」であり、それは頭部も、顔も、アイデンティティーもない「誰でもないもの」(「personne」)である。作品世界に登場するひとびとは皆、この母の被造物、「母の身体にまぎった胎児」(「des embryons confondus à son corps」)なのだ。⁽¹⁾

「子宮の開閉」をモデルとする「畏の寓話」とは、「子どもと殺意のある子宮との格闘の物語」である。したがって登場人物たちは、「胎児」として、「子宮」のなかで窒息させられたり、溺れさせられたり、首を絞めつけられたりする宿命にある。フォニィは、このような登場人物への「子宮の畏」をいくつかの段階をもつものとして以下のように図式化した。まず登場人物は、「閉域」のなかにいる状況が喚起される。この「閉域」とは「子宮」の「閉域」である。この「閉域」のなかでの生に慣れきっていた登場人物はやがて、この状況のなかにとどまり続けることが苦痛となっ

ていく。これは「子宮」のなかで窒息してしまう、あるいは溺れてしまう危険が増大していることを示すものである。苦しみはじめた登場人物は、この「閉域」から外へ出ることを願うようになる。「子宮」からの脱出の願望である。ここで登場人物の「閉域」からの外出は許可される。しかし、この許可は「畏」である。というのも、開かれた空間へと出た登場人物が、再び「閉域」にひきもどされる出来事が起きるからである。そしてこのことが悲劇的であるのは、この「閉域」が今度は死を招くものとして機能し、登場人物を破滅させてしまうことである。以上がフォニィのいう「子宮による畏の寓話」の内容である。このことから、モーパッサンの作品世界、すなわち「畏の寓話」における無数の脅威的形象群の存在理由が理解される。「畏の寓話」のなかで、主体を絶えず脅かし、ついには消滅へといたらせる形象群は、その全体を決して表象できない、こどもを生んでは自分の領域へとひきもどして殺害する「太古的母親」の力の代理表象なのである。このようなフォニィの研究は、短篇小説における群衆という形象の機能を考察しようとするわれわれにとって、きわめて多くの示唆を与えるものとなっている。

2 モーパッサンの人格の精神病性の構造

ところでフォニイは、このような無意識的ファンタスムが繰返し生じる原因を、モーパッサンにおける人格構造の脆弱さに求めている。フォニイによれば、モーパッサンは、人格の発達を完成させ、性差というアイデンティティーの基盤となる「エディプス」を通過はしたが、統合することができなかつたという。ちなみにフォニイは、「エディプス」という概念を、精神—性的発達の頂点に位置する段階すなわちアイデンティティー—差異のモデルである性差が強化される時期、そしてこの完成が主体のアイデンティティーを確固たるものにするという意味で使用している。

モーパッサンにおいては、この「エディプスの脆さ」こそが、それ以前の精神—性的発達の一時期である「母—子の原初的未分化状態」への絶え間のない「退行」をひきおこしてしまふとフォニイは説明している。また「エディプスの脆さ」という心的発達の異常は、「父親の象徴的機能」の脆弱さ、または不在による主体の「母—子の原初的未分化状態」への「退行」の脅威の永続としても言い換えられるものである。本来ならば、父は第三者として、「母—子の原初的未分化状態」における双数的関係に終止符を打ち、

この原初的未分化状態の記憶を母親から分離した主体に完全に忘却させる役割を果たすものである。「エディプス」、すなわちこの「父の掟」の導入によって、主体は「母—子の原初的未分化状態」への「退行」から防御してもらえようになる。しかし、モーパッサンにおいては、「母—子の原初的未分化状態」の段階での「固着」が強く、この段階の「記憶」が主体の身体のかなかに「痕跡」として残存し、この記憶の想起が主体をたえずその段階へ「退行」させてしまふのである。フォニイによれば、このモーパッサンの「人格の精神病性の構造」が「畏の寓話」というものをうみだしているというのである。

以上、ベナルル—クルソドンとフォニイの研究を概観したが、二では、これらの指摘をもとに「マダム・バチスト」における群衆の機能の解明をこころみ、できれば新たな知見を付加することにする。

二 「マダム・バチスト」における群衆の
形象の機能

三百篇以上もあるモーパッサンの短篇小説のなかでは、

群衆はしばしば登場するのであるが、「マダム・バチスト」(《Madame Baptistie》1882年11月22日、『ジル・ブラス』紙)においては、群衆が物語のはじめからおわりまで出現し、他の作品よりも群衆という形象が増幅されて描かれている⁽¹²⁾。したがって、この作品は、モーパッサンの短篇小説における群衆の形象を考察するのに最適な作品であると思われる。

まず分析の対象となる作品のあらましを提示したい。これは地方にある町の女性の受難劇である。土地の富裕商人フォンタネルの娘の受難は家の下男バチストによる暴行によって開始される。三カ月もの間、その身体を弄ばれた少女は、あわや死の淵へと追い込まれるが、事件の発覚と裁判の判決によって、この男から解放される。ところが彼女の受難はここで終わらない。事件の噂を知った町の住民が彼女を迫害するのである。住民は女性との接触を避け、彼女は共同体のなかで孤立無援状態を強いられる。しかし、やがて女性に救い主が登場する。町の外部から来た青年は、女性の美しさにひかれ、ひとから事件のあらましを聞かされても、それを問題とせず、彼女に求婚し、二人は結ばれ

る。自分の妻を共同体のなかでしかるべき地位を獲得させようと、この夫となった男性は力を尽くす。これが効を奏して、住民たちは次第に女性の過去のことを忘却しはじめ、さらに女性が身重になった知らせをうけると、住民による迫害は消滅し、彼女は暴行事件以来、はじめて幸福になる。ところが、ある事件をきっかけに女性はもとの不幸な状態へと一気につきもどされてしまう。土地の守護聖人のお祭りのなかで開催された合唱コンクールの賞牌授与式において、二等賞の授与を不満に感じたある合唱団の指揮者が、賞牌の授与役である女性の夫にたいして、受け取ったメダルを投げつけ、さらにその妻の過去を喚起する言葉によって中傷するのである。これを受けて、事件を思い出した会場の人々は、夫に付添うかたちで参席していた女性に気がつき、いっせいに嘲笑する態度を取るのである。当の女性といえど、忌まわしい過去を喚起されたことと群衆の残酷な態度を前にして、半狂乱状態に陥ってしまう。会場の大混乱によりセレモニーは中止され、女性は、家路の途中で夫の制止する間もなく、橋の上から身を投げて自殺してしまう。

以上のように要約されるこの「マダム・バチスト」とい

う物語を、一で述べた先行研究において、短篇小説共通の構造として抽出された「畏の寓話」と、ならびにその精神的分析的解釈から指摘された「子宮のファンタズム」という読解軸によって分析できるのかを検討し、そのうえで群衆の形象がそのなかでどのような機能を担わされているのかを見ていきたい。

二―「閉域」と群衆

「マダム・バチスト」の女性主人公の悲劇は「閉域」の執拗な呪縛から身を解き放つことができないことにある。

家の下男による少女の暴行事件は、牢獄という「閉域」として表象されている。

「フォンタネル夫妻は、娘をまるで牢獄から出てきた子のように見ていたのです」(六五八頁)。

暴行された自分の娘に対する両親の冷淡な態度を描いたこの一文の「牢獄」(《baigne》)という表現は、女性が「前科者」として忌避の対象と見なされていることを示す

とともに、暴行が「閉域」のなかでの監禁であったことを形象化している。暴行事件の発覚によって女性は自由の身となる。ところが、事件のうわさを知った町の住民からなる群衆の女性に対する迫害がおきてしまう。

「娘は、町の人から、まるで化け物か、畸形児のように見られていました。〔……〕往来では、娘が通りかかると、みんなは振り返ってみます。散歩につきそっていく女中のは、よりつこうとはしません。まるで、娘から伝染病が発生して、そばによるとかたっぱしからうつされてしまうとでもいったようにね。」(六五五頁)

「ペスト患者も同然に扱われていましたので、町の娘たちは、そばによってはいけないといふくめられていたのです。」(六五五頁)

以上のような引用に見出される「接触の忌避」と「視線の集中」による包圍網を女性の周囲に形成する群衆の迫害は、女性をそのなかに閉じ込める「閉域」を形成している

ということが出来るだろう。事件を知った群衆が女性を迫害するという出来事とは、暴行事件と群衆の迫害が両者とも「閉域」を形成するものであることによって、女性が畏にかけられたという状況を喚起するものとなっているだろう。暴行事件の発覚と裁判による下男への刑の宣告などによって、女性はそれまでそのなかに閉じ込められていた「閉域」の外へ出ることが許された。しかし、群衆の迫害が「閉域」を形成することによって、開かれた空間に出ていた女性は「閉域」にひきもどされて、再びそのなかでの監禁状態を余儀なくされるのである。このような女性に対する「閉域」の開閉による畏は、物語の後半、女性の夫による女性の救出劇とその破綻というかたちで反復されている。男性との結婚、この夫となった男性の尽力、そして妊娠によって、いったん、群衆の態度は大きく変化する。

「そのうちに身重になりました。そのことが知れわたると、最もうるさがたの連中までが、女性を快く家に迎え入れるようになりました《les personnes les plus chatouilleuses lui ouvrirent leur porte》(六五七頁)。

この引用の「女性を快く家に迎え入れる」(《lui ouvrirent leur porte》)という表現の字義どおりの意味は「彼女に扉を開く」であるが、このようにして、群衆の迫害が消滅することによって「閉域」が開かれ、女性が外の空間へ出ることが許されたことが示される。しかし、開かれた空間へと解き放たれた女性の自由はまやかしの自由であることが判明するのが、守護聖人のお祭りに開催された合唱コンクールの賞牌授与式の場面である。というのも、二等賞授与を不満として隣村の合唱団指揮者が発した女性を侮辱する罵り言葉を契機として、群衆が会場にいた女性を探し出し嘲笑するという一連の出来事は、女性の「閉域」へのひきもどしを描いたものとしてそこに置かれているからだ。合唱団指揮者の暴言に反応した群衆は、どっと笑い出したあと、「みんなの目が、あの気の毒な女性の方へ向けられ」(六五七頁)、またも「視線の集中」によって「閉域」が回帰する。そして女性は畏に捕らえられる。

「彼女は三度も続けて立ち上がりかけては、そのつどべったりと座席に腰を落としてしまいました。この場から逃げ出したくても、まわりのひとだからとおりぬけら

れそうもないのがわかっていたからでしょうか」(六五七頁)。

ここにいたって、群衆の迫害の消滅による女性に対する開かれた空間への外出の許可は、実は「畏」への誘い込みであったことが判明するのである。

以上のことから、「マダム・バチスト」という女性の悲劇物語の内的構造は、フォニイがモーパッサンの作品の物語叙述のシェーマとした「畏の寓話」であり、群衆は、「畏の寓話」のなかの登場人物に外出の自由を与えては、すぐにひきもどしてこれを破滅させる「閉域」を形成する形象として表象されていることが導き出されるのである。

二―一 群衆と「太古的母親」

だが、女性を何度も畏にかけては破滅へと至らせる「閉域」の呪縛力は、一体どこからもたらされたものなのだろうか。テキスト内部において、群衆に与えられている形象から、この問いに対するある程度 of 回答を導くことができ

ると思われる。

1 「群衆」と「子宮の太古的ファンタズム」

女性主人公を畏にかけながら呪縛する「閉域」の物語とは、ほとんどの場合、作家の無意識のなかへと抑圧される「子宮の太古的ファンタズム」を表象するものであるというフォニイの観点に立てば、「閉域」を形成し、その扉の閉閉によって女性を破滅へといたらせる「迫害的群衆」の行動は、この「子宮」の「存在を生んではすぐに自分のほうへとひきもどし殺害する」力の代理表象だと考えられる。実際、「マダム・バチスト」におけるいくつかのエピソードは、「群衆」と「母」の暗いつながりが察知できるように造形化されて、読み手のまえに置かれている。

例えば、以下の公園のエピソードには、既に他の迫害の場面で見たような「閉域」の閉閉による「畏の寓話」が内的構造として存在している。放課後の公園で遊ぶこどもたちを淋しそうに眺めるだけの少女は、一緒に遊びたい衝動によって、その集団の輪のなかへ加わりうとする。「すると、たちまち、あちこちのベンチから、母親だの、女中だ

の、おばさんだのが駆け寄ってきて、お守りを任されている嬢やたちの手をつかむなり、あらあらしくひったてていってしまう」(六五五頁)のであり、彼女がそこからの脱出を試みた「閉域」を復活させてしまうのである。このような形で畏を形成する群衆の陰険な行動が、「存在を生んでは、自分のなかに引き戻して殺す子宮」の権力行使と重なることは、少女を「閉域」へと引き戻す「群衆」が「母親」を中心とした形象を持っていることによって暗示されている。

また、さらに、この突き戻された場が「子宮」であることも十分予想の圏内にある。公園のエピソードに登場する奇妙な女中の存在が、その予想にある程度の妥当性を与えてくれるだろう。公園でひとり残された少女は、途方に暮れ、悲しさに胸が張り裂けそうになり、「付添いの女中のところへ走り寄って、そのエプロンに顔をうずめたまま、泣きじゃくって」(六五五頁)いるのだが、この女中についての描写は皆無、彼女はただ、いじめの一部始終を見つめるばかりなのである。物語でしばしば登場する女中は、公園のエピソードを含めてふつう、《domestique》、《bonne》という語で示されるのであるが、しかし、そ

の直後の場面で、「おもてに出るときには、女中が付添っています」(六五六頁)と述べられるときには、《gouvernante》の語があてられている。この「女中」(《gouvernante》)の字義通りの意味は「支配する女」である。フォニイによれば、主体は「畏」にかかれは、「子宮」太古的母親」の場である「母」子の原初的結合という未分化状態」のなかで自己喪失することになるわけだが、実際、読み手は、少女が畏にはまって「女中」||「支配する女」のエプロンのなかに顔をうずめて泣く場面に、「涙」という「水」が氾濫している「容器」としての「太古的母親」のなかで、「顔」という主体のアイデンティティを保証するものが溶解していくイメージを重ね合わせるように誘われるのである。畏にかかった少女を優しく迎える残酷な「母」としての女中。こうして、少女を迫害する群衆の向こう側には彼女らを操る「太古的母親」の不定形な黒い穴が開いていることがここで示されているのである。

このような群衆と母の暗いつながりは、女性の忌まわしい過去が喚起され、彼女が群衆によって嘲笑されるセレモニの場面においても造形化されている。そこではやはり「母親」と「こども」の結びつきのイメージを強調する群

衆の形象が、この場面における女性主人公の自己喪失は、「こどもを自分の領域にもどす」という「太古的母親」の権力行使によるものであることを示すものとして読み手のまえに置かれている。まず指摘したいのは、母親の存在を示すような「町の上流婦人たち」の描写が、合唱団指揮者の行為による女性の過去へのひきもどしの瞬間の直前に置かれていること。これは、あたかも、女性の転落が母親の立会いによっておこなわれるという印象を読み手にあたえている。つぎに、女性が畏に捕らえられたあとの群衆の騷擾を描いた部分では、「問題の女性の顔を一目見せようと自分の妻を抱き上げる男性たち」という奇妙な形象がまぎれこんでいることが、畏にかかった女性が母親によって抱擁されていることを暗示している。「男たちはめいめい自分の妻を両腕に抱き上げて、例の女性を見せようとしませす」(六五七―六五八頁)という一文におけるこの「夫による妻の抱きかかえ」は、性差、年齢差をこえて「母子像」のイメージを喚起する形象ではないだろうか。これらの形象によって指示される母によるこどもの強制的な抱擁の帰結としては、こどもの自己喪失が待ち構えている。セレモニの帰り道に女性が川という「水」のなかで自殺す

る(六五八頁)のは、胎児がそのなかで溺死する「羊水的環境」としての「太古的母親」のなかでの消滅を意味するものと考えられる。

フォニイによれば、登場人物に対するこのような「太古的母親」の権力行使、「子宮のファンタズム」の呪縛の原因は、一で紹介したようにモーパッサンの人格の精神病性の構造、すなはちそのエディプスの未完成という伝記的事実のうちに求めているが、女性に対する「群衆の迫害」¹¹「子宮」の呪縛の原因は、テクストの内部に存在している。そこでは、「父親的なもの」と群衆の対立の構図が浮上するだろう。

2 「父親的なもの」の無力

「太古的母親」による「畏」を許してしまう「マダム・バチスト」における父親の象徴的機能の不全はなによりも、女性主人公の「実父」の無力さによって表象されている。男に暴行され、町の共同体によって村八分される自分の娘に対して父親は何の保護的役割を果たさない。ただ「娘をまるで牢獄から出てきた子のように見ていた」(六五六頁)

だけである父親は、娘を庇護するどころか、母親の側に立って、子を疎むのである。このような実父の父親の機能不全は、女性主人公Ⅱ主体の退行を防ぐべきもの、すなわち暴行事件を喚起する群衆の力にたいする「法」および「女性の夫」の無力、そして「セレモニー」の破綻というかたちで変奏されていることが指摘できる。

まず「法」が機能不全に陥ってしまふ。「法」とは、具体的には、暴行事件の裁判と下男に対する刑の宣告のことである。ここで「法」には、父親の象徴的機能が期待されている。暴行事件における二つの身体の結合を前エディプス期の母子結合としてとらえるならば、「法」は、結合したものの一方を他方から分離し、二度とそれらが結合するのを可能にさせない掟として第三者的に介入する。実際、下男は無期懲役となったことで、もはや肉体的な結合はありえないことになるはずのだが、下男の行為を代行する群衆の迫害によって、この結合が記憶として回帰してしまうのである。結合の状態を喚起する「マダム・バチスト」という徒名が群衆によって繰り返し、唱えられることは、その意味で象徴的なものといえよう。次に、女性の「夫」の無力が機能不全に陥る。夫の尽力とセレモニーは、法と

同様に、女性の主体性を救出しようとする父親の象徴的機能として介入してくる。正式な結婚と夫の尽力は、ある程度女性を暴行事件の記憶、すなわち母子融合の記憶から解放することに成功する。というのも群衆は、事件のことを次第に忘却していくからである。自分を救出する夫を女性は「神」として熱愛する。この「神」のような夫の尽力は、母子結合の間に入って、女性を主体化する父親の象徴的機能を担うものとしてあるだろう。そしてメダルの授与式は、夫の尽力の最終的目標である女性の主体化を確固たるものにする儀式として把握すべきものである。このことは、授与式が、「守護聖人のお祭り」の枠の中で行なわれたことによって暗示されている。「守護聖人のお祭り」とは、守護聖人の庇護のもとに共同体が結束を固める行事である。したがって「神」としての夫がメダルの授与役を務めるこの守護聖人の祭りの枠内で開催されるセレモニーは、母子の間に割って入る父親の象徴的権能が発揮されることが予期されるものであり、女性はその象徴的機能によって主体性を獲得できる望みをもたされる。ところが、隣村の合唱団指揮者の行為によって母子の未分化状態の回帰がおこる。これは夫の脆弱さを示すものである。夫は、回帰の

妻まじい威力にたいしてなすすべもない。回帰を眼に見えようなものにする群衆の反応によって儀式は取りやめになる。ここに夫の尽力とセレモニーという母と子の間に入り女性を主体化する父親の象徴的機能は不全に陥るのである。

最後に、この「守護聖人のお祭り」のセレモニーの破綻による女性のアイデンティティーの悲劇は、下男バチネの暴行に重ねあわされたバプテストバプテスト・ジャンルバチネのヨハネによるイエスの洗礼が予告したカタストロフであることを指摘しても良いだろう。「父親の象徴的機能」の機能不全によってその主体性を消滅させられるという女性の悲劇が、群衆に埋め尽くされたゴルゴダの丘で「父なる神」に対して「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」(マタイ27・46、マルコ15・33)と叫んだイエス・キリストの受難に重ねあわされているのである。

結び

序でも述べたように、主体のアイデンティティーの問題を主題化するモーパッサン文学において、群衆はその過程

に関与するものとして様々な論者によって論じられてきた。しかし、それらの研究は、群衆が、アイデンティティーの溶解の恐怖をひきおこす強迫観念のひとつであることのみを指摘するものが多く、群衆の形象が作品の構造のなかでどのような機能を担っているかについての本格的な考察は少ない。長篇小説に描かれる群衆に関しては、この形象が主人公の自己喪失の過程をうつつ鏡の機能をもつというプロットにとって重要な機能を果たしていることを解明した研究はいくつかあるのだが、短篇小説における群衆の形象についての研究は皆無である。本稿では、この欠如を埋めるべく、群衆が重要な役割を果たす短篇「マダム・バチスト」を取り上げて、群衆の形象が作品のプロットにどのような関係し、この形象に担わされている意味をプロットについての精神分析学の知に着想をえた研究をふまえながら、「アイデンティティー」の問題という視点から、解明することを試みた。

分析の結果、解明されたことは、まず群衆の形象が、主人公のアイデンティティー確立の困難という状況に大きく関与するものであるということ。本作品の群衆の出現、迫害は、作品の物語叙述のシェーマである「畏の寓話」のも

とにある「子宮のファンタズム」の力の代理表象にほかならない。またこのような機能の解明に加えて、群衆は、その特異な表象によって、フロイトの精神分析学の理論を先取りするようなかたちで、「退行」という病理的事象を浮き彫りにするものとして作品空間に置かれていることも見出した。

さて、ここで本稿の主要な論拠としたアントニア・フォニイの研究に対する筆者の見解について一言述べておく必要があるだろう。モーパッサン文学の中心には「母」の問題があり、すべての作品は、「主体と太古的母親との格闘」に還元され得るとするフォニイの説は、いささか図式的であることはいうまでもない。またフォニイがモーパッサン文学の分析装置として依拠するいくつかの精神分析学的な概念の使用もまた、いささか厳密性に欠いたものとなっているようにも思われる。しかし、筆者がこのような研究を本稿の起点に据えた最大の理由は、それが、群衆の表象にまつわる奇妙な細部の配置とその機能を解明するためのヒントを指し示すものであるからである。なぜ群衆の表象は「母親」、あるいは「母親」を連想させる形象と恒常的に結びつけられるのかという「謎」へアプローチするためには、

それがいささか図式的であるとしてもフォニイの理論は筆者には魅惑的なものであった。したがって、本稿の作品分析の手続きとその結果が図式的なものとなったのは、あくまでもモーパッサン文学における群衆の表象の特異性を求めるためのひとつの足がかりを得んためである。今後の研究の課題としては、今回の分析結果を十分にふまえながらも、フォニイの理論の提示する枠組とは一定の批判的距離をとり、新たな、より緻密な枠組の構築の可能性を探りつつ、群衆が登場する他の短篇小説群の分析を通じて、モーパッサン文学の群衆表象の特異性のありかをさらに探究していきたい。

- (1) モーパッサンの新聞論説記事は次にまとめられている。
 Maupassant, *Chroniques*, préfaces d'Hubert Juin, 3 vol., UGE, coll. 10/18, 1980 (réimpression 1993). またモーパッサンの新聞論説記事については次が詳しい。Gérard Delaisement, *Maupassant journaliste et chroniqueur*, Albin Michel, 1956. — Guy de Maupassant, *le témoin, l'homme, le critique*, 2 vol., Centre régional de documentation pédagogique d'Orléans-Tours, 1984. — *La moder-*

- nite de Maupassant*, Editions Rive Droite, 1995.
- (2) 第三共和政期の群衆心理學の問題について次に詳しく
Susanna Barrows, *Miroirs déformants Réflexions sur la foule en France à la fin du XIXe siècle*, Aubier, 1990.
- (3) Thierry Poyet, *L'héritage Flaubert Maupassant*, Kimé, 2000, p.176.
- (4) ハリ・ロシュエーンを経験した十九世紀後半の文学者の群衆＝大衆にたらしめる偏見については次に詳しく。Paul Lidisky, *Les écrivains contre la Commune*, Maspero, 1970.
- (5) Pierre Danger, *Pulsion et désir dans les romans et nouvelles de Guy de Maupassant*, Nizet, 1993. Pierre Bayard, *Maupassant juste avant Freud*, Minuit, 1994.
- (6) Claudine Giacchetti, *Maupassant espaces du roman*, Droz, 1997, pp.119-124 参照。
- (7) Antonia Fonvi, *Maupassant 1993*, Kimé, 1993, pp.44-76 参照。
- (8) Micheline Besnard-Coursodon, *Etude thématique et structurale de l'oeuvre de Maupassant: le piège*, Nizet, 1973.
- (9) 同書 p.10.
- (10) Fonvi, 前掲書 p.88.
- (11) 同書 p.93.
- (12) Guy de Maupassant « Madame Baptiste » in *Contes et nouvelles*, éd. par Louis Forestier, tome I, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade 1974, p.653-658. 「マダム・バチスト」のテクストは、この版を使う、本文中に頁数を記す。引用文は、『モーパッサン全集』第一巻（春陽堂、一九六五年）所収の邦訳に従ったが、文脈によっては一部改訳を施した。

二〇〇五年二月七日受稿
二〇〇五年二月五日レフェリーの審査を経て掲載決定

（一橋大学大学院博士課程）